

『新しい教材（北海道1・3）』一九五五年三月  
（放送・視聴覚研究協議会／北海道図書）

## 近代学習とリアリズム

矢口 新

（国立教育研究所）

（前略）

視聴覚教育という言葉がありますが、私はこの言葉はいろいろな言葉だと考えています。とかく学者はいろいろな言葉を作って人を混乱におとし入れる。悪いことばの一つと考える。私は、視聴覚教育において問題にする事は学習をして如何に実質あるものにするかという問題だと思っております。実質の、実体のあるものにするかという問題だと思っております。その事について論ずるべきであると思ふ。学習を忘れて視聴覚を論ずる人が多い、私は先ず学習を論ずべきだと思ふ。

（中略）

近代工業が発達している、交通が発達している、人口が多い、電力が豊富に消費されている、という。これらはいずれも言葉なんです。いわゆる、視聴覚教材として使われている地図も、ことば以上の何物でもない。これらはみな符牒なんです。紙の上に色がぬつてあり、おかしな形がかいてあり線がひいてあるというだけなんです。電力が使われているというのも丸の大きい小さいかわからないのです。人口が多いというのも丸の大小しかわからないのです。全部符牒なんです。先生が近代工業が発達しているといういろいろいわれることも符牒な

んです。私が実体のない学習というのは、符牒だけで行なわれている学習の事をいうのであります。学習というのはそういう符牒を口で言ったり聞いたりしている事ではないんです。リアリズムというのはなにも難かしい事ではないんです。事実そのものに迫るといふ事なんです。近代工業が発達しているというその事実に入るといふ事なんです。交通が発達しているという事は、交通が発達しているという、その事実に入ることなのです。そういうことのない学習はいくらやっても空虚なのであります。われわれはそういう学習を受けて来たのです。私自身そうなのです、今さら、それは泣いても泣ききれない、そういうように感じるのです。その事が、われわれが今、視聴覚教材とか視聴覚教育といっている事の一番大事なことであつてまた全てと思ふのです。それ以外の何ものもない、全体の学習をそういう考え方で見直さなければならぬと思ふのです。（中略）

☆ ☆ ☆

私の関係した「造船工業」という教材映画がありますが、船を造るその事実を見せる事の中に、原料がどんどん運ばれ、たくさんのさい限のない人間が働き、汽車で、船で、どんどんと原料を運んでいくその事実の中に、交通であろうが、人口であろうが、電力であろうが、ちゃんとその中に内在しているものが見えている。それを見せる事によつて、こんなに多くの交通機関があつて、造船工業が成り立っているんだよ、こんなにたくさんの人が工場の門をくぐる事によつて造船工業が成り立っているんだよ、こんなにたくさんの電力が使われて造船工業が成り立っているんだよ、と教える事ができるんです。これで立派に立地条件というものが説明されるではないですか。また、海上輸送というのがある。あの横浜の港から石炭を積んで京浜工業地帯へ

運んで行く、六〇〇〇トンという石炭が一日の中に消費されてゆく、その石炭は火力発電というものに使われ、工場という所で使われている、六〇〇〇トンといえば、子供の経験からいえば、あの十五トンの車輻四〇〇輻に価する、その事において、交通というものが工業というものに内在しているという事がわかるではないですか。その事は、みなさん御存知の教材映画をみれば出ています。事実の系列があつて、例えば、化学工業、造船工業、金属工業というように事実の系列があつて、それぞれが交通を土台にして、人口、電力というものが土台になつて成り立っている。その一つ一つの要素をつかまえてゆく、そのつかまえた要素要素を概念としてとらえてゆく。符号を使つて事実の系列を概念の系列としてゆく。この事が事実が把握されたという事だと思ふ。それは一人の先生が解決する問題ではない。近代学習というものは、実体のある学習をおし進めてゆくためには、如何にして、生徒が学習するための媒介となる所の材料を生徒の前に提示してやるかという事なのです。その材料はリアルなものであればあるほどいいという事なのです。

一般的にいつてそういう事が言える。しかし、テクニクの問題といますか、技術の問題となりますと、実際に現場に行くとしても、生徒は、それを見ぬく目を持っていないのですね。機械が動いているのか材料が動いているのか一目見ただけではわからないでしょう。そういう状態に置くとかえつてわからなくなる事があるわけでありませう。ですからそれよりもむしろ生徒にとつて解り易い材料、つまり構成された材料を使う方がより有効であるという事は技術上考えられる。しかし、結局は、構成された材料を使うという事であつても、事実そのものの中に入つていくという事の手段である。最後はどこまでも事実の中に入るのである。そこで自分のはらの中に、概念としてとら

えておく。その事において単に理解ばかりでなく力が湧いてくるのです。人というものが作られてゆく、単に観念が作られてゆくのではない。そういう理念の方向に如何なる教材を如何におくべきかを考えてゆかねばならない。私は今、映画を使うといひましたが無も映画ばかりでなくてもいい。結局においてその事実に向ふという系列において如何なる教材でもいい。

☆

☆

☆

私たちの昔習つた地理、歴史などで、地理の本などには、関東地方は一府六県に分れたり、次には何県何県何県、次には地勢、何々山脈というような事を暗記したものです。今でも、何県の県庁の所在地はどこと暗記したものを憶えております。しかるにその県庁たるや私は知らなかつた。それをはつきり、県庁というのは、こういうものでありしかと知つたのは高等学校に入つてからなんです。三年生の頃なんです、その頃の高校生は乱暴でして、街上ストというものをやつて裸なんかで踊つたりしたのですが、オマワリさん、業をにやして帽子なんかみな警察に持つていつてしまつた。私はそのころ委員をやつていましたから、警察からお前の学校の帽子が六十幾つ来てるから県庁までとりに来いといわれたので、恐縮しながら愛知県庁にとりに行つた。そしてそこではじめて、県庁とはこういうものでありしかと知つたのであります。われわれの生活に必要なのはこういうことである。こういう人間がこういう所についてこういうことをやる、それまでは何も知らず、県庁の所在地は愛知県名古屋……と知つていただけなのであります。そういうふうな系列で教育が考えられて来た時代がつい最近まであつたのです。今だにそういう考え方で考えられているのが日本人の全体だと思ふ。この国に住む人間の九割九分までが、そうした観念的

な物の考え方をしていたのだと思う。

☆ ☆ ☆

私は昨日はじめて北海道に来たのですが、旭川に着くまでまんじりともしないで沿線を眺めて来たのです。今まで、観念的には知っていたのですが、事実の世界を知らない。千歳の飛行場に着いた時、十二時の急行に間に合うためには、バスで行くかハイヤーで行くかと迷った、どうも間に合いそうもない、その時、私にはハイヤーで行くか自信がない、事実の世界を知らないものですから勇気が出ない。自信とか勇気は観念では養えない。この次からは、私は、もう自信がある。へまな真似はしない。そのように、学習がリアルに行なわれると力が湧いて来るのですね。見るということは大変よい事で、私は北海道を旭川に着くまで見て来ました。(中略)

北海道は伝統の無い国である。伝統のないという事は悪い意味じゃなくて、よい伝統を作る可能性を持つているということなのです。(中略)

新しい伝統を作るために北海道総合開発をやっているという事は新聞で知っている。それをこの目で見て、はじめて力が湧いて来たんです。情熱が湧いて来るんです、そして、もつと詳しく実態を見せていただいたら、もつと詳しく生活を見せていただいたら、就中、教育の面を見せていただいたら、素晴らしい構想が湧いてくるんじゃないかと思うんです、新聞で読んだり人の話を聞いたりしている間はそうした力が出て来ないんです。見る事によって、たくましいものが出て来るんです。見る事によって、そういう構想力が出て来るんです、見る事に依って、そういう力が湧いて来るんです。北海道に希望があるというのは、私の見た、その経験に基づいて言えるのです。

また、汽車の中で人々の顔を見たのですがいろいろな地方の顔が見

られた。(中略) こうした様々な人々の血が混淆して新しいエネルギーが生まれるであろうという事をしみじみ感ずる。そういう事を私は観念的には知っていたのですが、その事実にあふれて、なるほど人間の生活の仕方についてこういう教育をしたらよいな、という事が浮かんで来るのです。今北海道に必要なのは、そういった構想力だと思うんですね。現実を作りあげるそういうもんだと思う。そうしたものがまわって構造あるものになってゆかなければならない。それが構造を持つたら大変なエネルギーになるだろう。そういうもののために学習をもつとリアルにし、その中に入って物を感じ、体得し、見ながらエネルギーを出してゆかねばならない。事実に触れる事なくしては構想力は湧いてこない。私は北海道においてこそ近代学習がもつとも発達していいと思う。

(本文は、二十九年十一月二十六日旭川市東五条小学校で行なわれた、視聴覚教育研究会における講演速記の一部を、特に開催校の御好意で掲載することになったもの。なおこの速記をまとめて下さった同校大島忠次先生に深く謝意を表します。)